

畑を始めて1年、勉強になることが沢山あります。カラスが柿の実を青い内から食べるので半分だけネットを掛けました。すると、リンゴの木に鉄砲虫が入りました。柿の木にネットを掛けた時からスズメが庭に来なくなり虫が繁殖したのです。

「神はカラスを養ってくださる」(ルカ 12:24)、「獣やカラスのたぐいが求めて鳴けば食べ物をお与えになる」(詩編 147:9)のみ言葉を知っているのに、カラスを排除してリンゴの木に被害を与えました。神様が造られた世界は、菌も虫も鳥も動物も人間も共に生きるバランスが取れるようになっていてと信じていても実践することは難しい。今朝の聖書には、信仰があると言っても行いが伴わなければ何の役に立つかと書かれています。

先週の日曜日は宗教改革記念日でした。1517年、当時のローマ教会が法王庁の礼拝堂を建築するために贖宥状を発行して、これを買えば煉獄にいる家族が天国に移されると宣伝しました。「地獄の沙汰も金次第」みたいなことは、聖書に書かれていないとマルチン・ルッターは改革を始めました。宗教改革が当時の封建社会を揺り動かし貧しい農民達が、小作制度の改革を求めて1524～25年に農民運動を起こし、その一揆が激しくなってくると、ルッターは軍隊を派遣して鎮圧を勧めました。ルッターも、自分の立場が危うくなると信念を守れなかった。

23節に「アブラハムは神を信じた」と書いてあります。アブラハムは99歳でサラは89歳でしたが神様が言われるのだからと信じました。そして1年後に、イサク生まれたのですが神様は「独り子イサクを献げなさい」(創世記 22:2)と言われました。神様が言われるのだからと、モリヤの山に向かってイサクを連れて旅に出ました。道中でイサクが「お父さん、薪は積んであるけど、神様に献げる小羊はどこにいるの」と言いました。「お前だ」とも言えず、「神様が備えていてくださる」と言いました。アブラハムは神様の愛を信じていたのです。必ず、神様が別に羊を用意してくださると。

アブラハムは神様の存在を信じたのではなく、神様の愛を信じたから、99歳になっても希望を持って生き、神様がイサクを献げるように言われた時も自分の損得で「ノー」と言わないで、示された山に向かって行ったのです。「行い」か「信仰」ではなく、行いの伴わない信仰は死んだものだと言われている点が大事です。神様の愛を信じて、行動に移す時に、出来事が起こり、自分でも感動し、それを見て本当に神様は愛だと告白する人々が生まれてくるのです。